ＳＤＧｓの達成に向けた多様な他者と協働する資質・能力を育む小学校教育の推進
―岐阜県各務原市立蘇原第一小学校の実践―

今尾謙二[1)]・益川浩一[2) 3)]

[1)]岐阜県各務原市立蘇原第一小学校校長（〒504-0854 岐阜県各務原市蘇原野口町 1-1）

[2)]岐阜県各務原市蘇原中学校区学校運営協議会会長（〒504-0843 岐阜県各務原市蘇原青雲町 1-10）

[3)]岐阜大学地域協学センター長（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

1. はじめに

ＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals）「持続可能な開発目標」については、今更多くの説明は不要であろう。2015 年９月に開催された国連サミットで採択された文書の中で、「2030 年までに達成すべき目標」として制定された。当初から全世界に向け情報発信はなされていたが、2020 年頃から、日本でも企業が方針として前面に掲げたりメディアで取り上げられたりすることが多くなり、社会の人々の意識が高まってきているところである。

2019 年４月、校長として岐阜県各務原市立蘇原第一小学校に赴任した筆者（今尾）は、学校経営構想に、ぜひＳＤＧｓを取り入れ、この理念を児童や職員に意識させたいと考えた。翌 2020 年度に全面実施となる小学校学習指導要領[1)]でも、ＥＳＤ（Education for Sustainable Development）「持続可能な開発のための教育」が基盤となっており、今後の教育の大きなテーマとなっている。

その学習指導要領の冒頭には、今の子どもたちが成人して社会で活躍する頃は、我が国は「厳しい挑戦の時代」を迎え、「予測困難な時代」となっていること、そうした時代に、一人一人が持続可能な社会の担い手となること、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きること、などの記述が見られる。

こうした多くの課題を抱えた時代に、「多様性」「協働」をキーワードとして、どのような小学校教育を推進していくことが必要か、その方向性を考究することが本稿の目的である。

なお、このような思いを大切にしてスタートをした 2019 年度であったが、その年度末に新型コロナウイルス感染症の爆発的拡大により、臨時休校措置、諸々の教育活動の制限が余儀なくされ、そうした視点からも学校教育を見直す機会となったことを本文中には記したいと考える。

2. 取組の概要

新しく策定され、完全実施となった幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領において、全体の内容に係る前文及び総則において、「持続可能な社会の作り手の育成」が掲げられている。筆者（今尾）は、こうしたＥＳＤの基盤となる考え方について、まず職員会議等の中で職員に対して研修を行った。

決して新しい教育を創り出すことではなく、これまで大切にしてきている教育活動を新たな視点で見直すこと、ＩＣＴの導入など教育の新たな可能性を想定すること、そしてＳＤＧｓの達成を意識させること、さらに教職員の持続可能な働き方という視点も踏まえて方向性を示した。

これからの子どもたちは、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、持続可能な共生社会を創っていかなければならない。そうした「共生社会実現」のために「多様な他者と協働する資質と能力を育む」ことに重点を置き、

（１） 学校の経営方針にＳＤＧｓを位置づけた教育活動の展開
（２） 学校生活において児童同士が互いに認め合い協働する資質・能力を育む取組
（３） 地域や社会の中で多様な他者と協働する資質・能力を育む取組

の３点から、以下に取組を報告する。

3. 学校の経営構想にＳＤＧｓを位置づけた教育活動の展開

3-1. 校内組織のマネジメントと職員への周知

3-1-1. 教務部による働きかけ

ＳＤＧｓについて、教頭、教務、生徒指導主事ら教務部スタッフにまず理解を促した。ＳＤＧｓの概要を伝え、職員や児童にどのように広げていくかを検討した。そして、教務部による継続的な職員への働きかけにより、児童に活動の具体を提供できるような体制づくりに努めた。

3-1-2. 中核となるリーダーの育成

校長より研究推進部委員長（兼学習指導部長）と指導部長（生活、健康安全、特別活動）、主任層に各指導委員会の担当する活動や学年の学習とＳＤＧｓの関わらせ方について指導をした。

そして、ＳＤＧｓについて職員会議で学習会を行った。学校経営構想の５つの重点の一つに掲げたが、当初は職員の理解が十分でなく、自分たちの授業実践とＳＤＧｓとの関連性について気づいていない状況であった。そこで、研究推進部委員長や指導部長らをリーダーとし、各学年の教科学習や総合的な学習の時間、高学年による委員会活動など全校的な活動の内容が、ＳＤＧｓの１７のゴールとどうつながりがあるのか、その関連付けを行わせ、職員の意識を高めていった。職員用に関連書籍を購入して参考にさせたり、これまでの教育活動をＳＤＧｓの視点から見つめ直させたりして、どのような実践を行っていくことができるか提案を求めた。まずは、学習プリント作成の際には、関連するゴールのアイコンを位置づける等簡単なところから始めた。

3-2. ＳＤＧｓとの出会いと児童会活動

児童に対しては、校長講話の中で、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリ氏を紹介し、意識しやすい環境問題からＳＤＧｓの内容について説明した。「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」と１７のゴールを示し、児童に自分たちが社会に出る 2030 年をイメージさせ、「どんな世界であってほしいか」「自分にはどんなことができそうか」など、学年発達に応じて考えさせるようにした。

児童会では、企画委員会の児童を中心にＳＤＧｓについて話し合い、どういった活動ができるかを具体化し、蘇一小バージョンとして全校に紹介をした。事前に担当職員にも活動をイメージさせておいたことで、スタートから児童の張り切る姿が見られた。

写真 1･2･3　児童会企画委員会のリードによるＳＤＧｓの活動と校舎内掲示

給食時の校内放送では、担当児童が１７のゴールと自校での活動内容を順に解説し、放送の冒頭には、「笑顔と優しさでつながり、ＳＤＧｓを意識する蘇一小の皆さん♪」と爽やかなアナウンスで放送が始まる工夫をして、全校児童をリードした。

3-3. ＳＤＧｓから「５つのＰ」へ

2019 年度の途中に児童にＳＤＧｓを紹介し、2021 年度までの２年半、学習や児童会等の特別活動でＳＤＧｓを取り上げてきたことで、多くの児童が何らかの形でＳＤＧｓを意識した学習活動に関わることができたと考えられる。

しかし、児童との活動を進めていく中で、１７のゴール数がやや多いこと、児童の生活と関わりの弱いゴールがあること等が気になり始めた。また、「持続可能」を掲げるＳＤＧｓは、「人類の存続」の意味合いが強く、児童たちの学校生活の中には音楽や芸術、スポーツなど文化的な内容をもう少し含めたいと考えていた。2022 年度に向け模索している時に、ＳＤＧｓの基本概念となる「５つのＰ」があることを認識した。

図１・２にある「５つのＰ」は、ＳＤＧｓの基本概念とされ、目標に向けてバランスのよい進展が必要とされている。“No one will be left behind（誰ひとり取り残さない）”というスローガンのもと、「５つのＰ」は経

５つのＰ
People　【人間】
Prosperity　【繁栄】
Planet　【地球】
Peace　【平和】
Partnership　【パートナーシップ】

図１　ＳＤＧｓ「５つのＰ」

図２　児童に提示した「５つのＰ」

図３　学校経営構想と「５つのＰ重点・宣言」

済・社会・環境のバランスの取れた持続可能な開発を目標としており、人間や地球の豊かさ、また平和という目標はそれぞれが互いに作用し維持されるというものである。

この「５つのＰ」を 2022 年度の学校経営の柱に据え、学校の重点と関係づけることにしたものが、図３である。ＳＤＧｓの１７のゴールについては、関連するＰの内容に位置づけ、「繁栄」という意味合いの強い“Prosperity”を「豊かさ」と置き換え、児童の学習や文化的・創造的な営みをこの項目として扱うこととした。

3-4. 学校経営構想

学校経営構想は、学校長の経営方針を表したものである。これに則って、各担当者が具体的な提案をし、教育活動が進められていく。

2020 年度には、学校の教育目標を受け「笑顔でつながる蘇一小　～ＲＳ１えがおプロジェクト～」（Ｒ＝令和、Ｓ１＝蘇原一小）を掲げ、学校で大切にしている３本柱「あいさつ」「学習」「ボランティア」を位置づけた。その具現のための重点として、「５つの重点・宣言」を取り上げている。

そして、2022 年度は、「笑顔でつながる蘇一小　～５つのＰえがおプロジェクト～」とし、それまで位置づけていた５つの重点を「５つのＰ」と関連させて提示した（図３参照）。

職員にその内容を伝え、４月の始業式の校長講話の中で、児童にその意味と、ねらいを伝えていった。

3-5.「明るく　楽しく　元気よく　『５つのＰ』で蘇ースマイル」

校長の方針を受け、児童会では、さっそく上記のスローガンを掲げた。児童会企画委員会では、自分たちにできることを、それぞれ「５つのＰ」でイメージし、全校に発信している。

各学年経営でも、「５つのＰ」を学年発達に応じて児童に提示し、諸行事や日常の生活、学習などの目標として掲げ、学年掲示板などに位置づけて、児童への価値づけを行っている。

写真 4･5　５つのＰに関わる児童会スローガンや学年掲示

3-6. ボランティア手帳との関連付け

各務原市では、市教育委員会と市小中学校長会とで「ボランティア育成パワーアップ事業」を立ち上げ、１０数年活動を推進している。「『明日の市民』となる小中学生が、家庭や地域等で自主的にボランティア活動を行うことによって、『ボランティアの心』や『他を思いやる心』、さらには『自分を見つめる力』を身に付けてほしい」という願いで実践されている。

この事業では、児童生徒一人一人が自分の活動を「ボランティア手帳」に記録している。ＳＤＧｓをスタートさせるにあたり、この手帳でも児童に意識化を図ることができるのではないかと考え、手帳のコメント欄にシール化したＳＤＧｓアイコンを貼り付けるようにし、自分の活動内容とその関連性を見つめさせた。「グローバルな視野をもち　自分にできること」を合い言葉に、ボランティア活動に精力的に取り組む児童が増えてきている。

写真 6･7　ＳＤＧｓと連携させたボランティア手帳

4. 学校生活において児童同士が互いに認め合い協働する資質・能力を育む取組

４１年ぶりに法改正がなされ、公立小学校の全学年で学級人数の上限が４０人から３５人に引き下げられた。少人数化は望ましい方向であるが、それでも、まだ３５人は多いのではないかと考えられる。しかしながら、財務面を考慮すると、今後しばらくはこの人数での公立小学校の学級経営を進めていくことになると推察される。

日本の学校教育では、この「学級」という単位で日々を過ごし学ぶ。それが集団つくりの基本ともなる。学級での日々の学習や生活、少人数の活動、そして学年から全校の異学年活動へ。小学校での学校生活は、「多様な他者と関わりをもつスタート」だと言える。

4-1.　「ひびきあい活動（人権教育）」を通して

誰もが相互に人格と個性を尊重し合い、支え合い、多様な在り方を認め合える全員参加型の社会をめざすことは、これからの時代を生きる児童にとっての課題の一つである。岐阜県では、人権教育を推進するために、人権週間に合わせて「ひびきあい活動」と名付けた実践をしているが、本校では、年間を通じて「ひびきあい活動」を位置づけ、いろいろな取組を行っている。多文化共生やジェンダー、ＬＧＢＴＱ、超高齢社会など、現代の大きな課題として人権教育の推進には、教職員の人権感覚を高めることを含めて、校長のリーダーシップが求められるところである。

職員会議では、管理職や人権担当者から人権に関わる情報提供をして共通理解を図り、各学年では、人権（Peace、People）に関わるキャンペーンを実施し、足跡を掲示している。各学級では、帰りの会によさを見つけ合う時間を設けたり、学級掲示に仲間のよさを位置づけるコーナーを設けたりしている。児童会では、あいさつをはじめ児童の善行について、全校的な立場から校内放送で紹介している。

人権週間に合わせた「ひびきあい活動」には、オンラインでの校長講話、各学級での人権に関わる道徳授業、人権教育に関わる家庭への情報発信等に加え、この時期に地域・保護者・学校が協働して「あいさつ運動」を実施している。

さらに、新たな人権課題として、新型コロナウイルス感染症に関する正しい知識や、情報モラルに関する指導を繰り返し行い、人権侵害やいじめにつながる言動等について意識できるように、全校的に働きかけている。

なお、紙面の都合で詳細の記述は省くが、インクルーシブな学級の実現という視点では、「合理的配慮・適切と思われる配慮」「ユニバーサルデザインの視点」「学級の支持的風土」[2)]の要素から授業の充実を図ることができるよう職員の意識を高めている。

写真８　地域や保護者の方と協働のあいさつ運動

4-2.　「主体的・対話的で深い学び」と仲間と学び合う授業つくり

一日を共に過ごす学級集団の経営が基本とはなるものの、一日の中心的な時間は、授業である。学校では、学校の教育目標の中にある「深く考え」や、仲間を大切に学び合う視点として「思いやり」について、どのような子どもの姿を目指すのかを共有し、授業実践を進めている。

2020 年に新しい学習指導要領が全面実施された。ここでは、育成する資質・能力が整理され、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点が示された。そこで、本校では 2019 年度より研究主題を「思考力、判断力、表現力が育つ学習～対話的な学びを通して～」と設定し、研究実践を行っている。研究を進めるにあたり、研究推進部では、「主体的・対話的で深い学び」を次頁の図４のように具体化した。

授業では、個人の考えをもった後、学年発達に応じてペア、トリオ、小グループから全体と交流をするといった「対話的な学び」を通して、思考力・判断力・表現力を育成する営みを繰り返すことを共通理解して実践を進めた。こうした日々の授業の繰り返しは、児童のすぐそばにある多様な考え方を育む大切な時間となる。

4-3.　「特別の教科　道徳」を通して

学習指導要領総則には「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳の時間（以下、「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動［小学校のみ］、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」と述べられている。このように、道徳教育は全教育活動を通じて行われることが基本原理であるとされている。

2010 年代に続発した深刻ないじめ問題や、情報通信技術の発達による生活の変化、少子化、核家族化等子どもを取り巻く環境の変化、自己肯定感や社会参画への意識の低下等、予測できない社会状況の中で、子どもたちは道徳観・多様な価値観を学ばなければならないとされ、児童の道徳性の育成は、まさに「よりよく生きる力」を育むことになると言えよう。

こうした中で道徳科の授業を進めるにあたり、道徳科の研究主題を「自己の生き方についての

主体的な学び	・学ぶことに興味・関心（興味・関心を高める）をもち、学習課題解決に向かう。 ・学習課題解決の見通しをもって粘り強く取り組む。 ・自分（の生活）と結びつける。 ・自己の学習活動や学習内容を振り返る。
対話的な学び	・子ども同士で対話する。 ・思考を表現（言葉）に置き換える。　・情報を収集し、整理し、説明する。 ・仲間と自分の考えを比較する。　・協働して解決する、考えを創り上げる。 ・自分で判断する。 ・教職員や地域の人と対話する。 ・先哲の教えを手がかりに考える。
深い学び	・各教科の「見方・考え方」を働かせる。 ・新たな問いを見いだして解決する。 ・知識・技能を習得、活用しながら思考する。 ・自己の考えを、修正を加えながら形成し、表す。 ・思いをもとに構想、創造する。

図４　研究推進部で具体化した「主体的・対話的で深い学び」

道徳科の対話的な学び	教材や体験などから考えたこと、感じたことを発表し合ったり、葛藤や衝突が生じる場面について、話し合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、議論したりする。
願う児童の姿	・他者の多様な考え方や感じ方に触れることで自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめる姿 ・学んだことから生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現しようとする思いや願いを膨らませる姿
研究主題	自己の生き方についての考えを深める子 ～他者理解から自己理解に重点をおいて～
研究仮説	教材を通して、登場人物の心情について、自分との関わりで考え、ありのままの自分を表出し、仲間の多様な考え方や感じ方への共感や気づきから、自分はどうあるべきかと自分自身に問いかける心の働きが生まれ、自己の生き方についての考えを深めることができる。
研究内容	①　自分と他者を比べ、受容的に聞き、受け入れ、自己を見つめる指導過程 ②　他者の考えを受け入れ、納得し、自己を見つめる手立て

図５　蘇原第一小学校道徳科の研究主題等

考えを深める子～他者理解から自己理解に重点をおいて～」とし、図５のような内容で実践を進めた。

4-4.　全校行事や学級活動・児童会活動等特別活動の価値

コロナ禍は、多忙を極める教職員が進める学校の教育活動に一石を投じる形となった。スクラップ＆ビルドで見直されるべき教育活動は、旧態依然として効率的なものになってこなかったが、コロナ禍を機に、多くの学校で大胆な改革が進められている。全校規模で集う集会スタイルの回避、リモートを巧みに利用した活動の工夫、行事の廃止や一時中止等、各校の状況に応じた対応がなされている。

しかしながら、児童がよりよい自分や学級・学校生活、人間関係を築く活動を通して、共生社会で協働の意義を感じながらよりよく生きる力を獲得することのできる特別活動が果たす役割は、ポストコロナにおいて今後ますます重要となると考えられる。

本校では、教職員で諸教育活動のねらいや価値を検討し、必要と考えた児童会活動や全校行事を少しずつ再開している。

運動会は、３年ぶりに全校で実施をした。保護者の参観は１家族１名のみ、種目数の調整や時間短縮で午前開催、応援合戦は行わずという内容での実施であったが、子どもたちの笑顔あふれる活動の様子を心からうれしく感じた。低学年児童が高学年児童の競技に歓声を上げ、高学年児童が低学年児童の演技に温かな拍手を贈る。全校で実施する運動会の価値を感じる時間となった。各学年のスポーツ大会やクラブ、委員会活動、児童会活動での縦割り遊び等、そのねらいや育成したい資質・能力を明確に描きながら、工夫して活動を仕組んでいくことが必要である。

写真 9･10･11　大切にしたい特別活動（左から運動会、縦割り遊び、６年生を送る会）

5. 地域や社会の中で多様な他者と協働する資質・能力を育む取組

5-1. 蘇原を学ぶ

これまでも、ふるさと「蘇原」をテーマにした教育活動が推進されてきているが、そこにＳＤＧｓを関連付けし、児童の意識を高めていくことが必要である。そして、ここで児童らが出会う「ひと」「もの」「こと」こそが、地域社会の「多様な他者」であり、諸活動を通して「協働」など多くのことを学ぶ貴重な機会となる。

特別支援学級は生活単元や教科で、低学年では生活科で、３年生以上では「総合的な学習の時間」で、蘇原地区やそこに住む人々、環境や福祉について学び、そこを足場としてさらにグローバルな視野へと広げていくことが重要である。以下に学年ごとの実践を述べる。

■わかば学級（特別支援学級）「地域の方と交流しよう・地域の農業を知ろう」

わかば学級では、地域ボランティアの方と地域ＪＡに支援をいただき、田畑での米作り・サツマイモ作り・イチゴ作りを行っている。交流を始めてから、２５年ほど継続している活動である。田畑は借地休耕田畑を利用しているが、その準備からボランティアスタッフの調整についても、その中心となる地域の方あっての活動である。その中心となって進めてくださるＡ氏は、以前ＰＴＡ会長を務め、その後も、この特別支援学級のことを大切に考えてくださっている。２５年の活動となると、当然ボランティアの方も高齢になり、中には他界された方もいる。しかし、現在でも、田植えや稲刈りには、２０名ほどの地域ボランティアの方が参加される。Ａ氏が新しい方に声をかけ、常に人材の確保に尽力いただいているのである。学校だけでは成り立たない活動である。

わかば学級　地域の方との交流 年間活動内容	
５月	「ようこそ」の会
	イチゴを収穫し食べよう
６月	どろべた祭（田植え）
	サツマイモ苗を植えよう
１０月	ざくざく祭（稲刈り）
	サツマイモを収穫しよう
	サツマイモを料理しよう
１月	ぺたぺた祭（餅つき）
	イチゴ苗を植えよう
３月	「ありがとう」の会

図６　わかば学級　年間活動内容

さて、このわかば学級の活動は、田畑の活動だけではなく、年度当初の「ようこその会」から始まる。新１年生を迎えての、わかば学級全員での歓迎会の際に、ボランティアの方にも参加していただく。顔合わせである。そして、図６にあるような年間の活動で、ボランティアの方と仲良くなり、収穫を祝う「ぺたぺた祭り（餅つき大会）」には、児童とボランティアの方の間で、会話が弾むほどになる。卒業を控えた時期には、「ありがとうの会」として、６年生への感謝と共に、ボランティアの方に対しても感謝の意を表する会を行う。大変有意義な活動として継続してきている。

こうした地域の方との活動や田畑での農作物作りの活動は、多くの児童に経験させたいものであるが、本校のような規模（現在、全校児童数８３０名程）では、場所や時間の確保がなかなか

難しいのが現状である。２年生は生活科の野菜作りの一環で、「サツマイモ作り」を行っており、このボランティアの皆さんに支援いただいている。まさに地域あっての活動である。

写真 12･13･14　わかば学級　地域の方と（左から田植え、稲刈り、餅つき）

■１学年「こうえんであそぼう」「きせつをたのしもう」～蘇原を遊ぶ～

学校生活に慣れてきた１年生が、学校外へ出かける活動の第一弾が「こうえんであそぼう」である。学校に隣接する公園や、歩いて１５分程の距離にある公園の遊具で遊ぶのである。これまでに遊んだことのある児童もいるが、学級の仲間と遊ぶその時間は、新たな意識が芽生える価値ある時間となる。蘇原地区にある複数の公園を覚え、帰宅後に友達と共に訪ねる新しい場所となる。「もの」「こと」との出会いである。

夏には「むしとあそぼう」、秋には「秋見つけ」として、蘇原の地域にあるいろいろな公園に出かけ、「季節を楽し」みながら「蘇原を遊」び、蘇原での活動を広げていくことになる。

また、地域の「ひと」との出会いもある。「むかしあそびをたのしもう」では、地域シニアクラブ、見守り隊の方を招き、一緒に遊ぶ活動をしている。見守り隊は、市青少年育成課が立ち上げた児童の安全な登下校のために活動している組織で、学校の諸活動にも協力いただくことが多い。ただ、この昔遊びを楽しむ活動については、コロナ禍もあってしばらく休止中である。また、「昔遊び」として、けん玉、おはじき、お手玉、メンコ、コマ回し等で遊んできたが、こうした遊びを楽しんだ世代の方達は高齢となり、次世代の方達は、すでにこうした遊びを経験していない世代となってきている。日本の伝統的な遊びの扱い方に、一考が必要な時期を迎えている。

写真 15･16･17　１学年　こうえんであそぼう・きせつをたのしもう

■２学年「野菜を作ろう」

２学年では、生活科で「野菜作り」の学習をする。一人一鉢でミニトマトやなす、ピーマンなどを選び育てていくのに加え、前述の特別支援学級の実践のように、「サツマイモ作り」を実施している。

特別支援学級の活動と同日、時間をずらして、同じ地域ボランティアの方の協力を得て、およそ１４０名の児童が活動する。主に苗植えと収穫時に世話になり、児童らは２回程草引きの管理を行う。苗植え、収穫の準備から片付けを、そして、定期的な管理をボランティアの方にしていただく形である。学校にとって、地域ボランティアの方は、大変ありがたい存在である。

児童らは、恵みに感謝し、収穫の喜びを味わう。コロナ禍前は、簡単な調理をして収穫祭を行っていたが、現在休止中である。収穫した芋は、自宅に持ち帰り、家族で楽しんでいる。

■３学年「蘇原名人調査隊」

校区内にあるスーパーマーケット、消防団、工業所等を数チームに分かれて訪ね、そこで働く方の工夫や苦労について調査する。訪問先の一つであるＯ工業所は、工作機械を中心に航空機、

工作機械用部品関連の精密部品加工を手がけている。近年、「かかみがはらＳＤＧｓ」にパートナー登録され、「持続可能な加工技術の開発、食料生産システムの構築等」について、児童にも話をしてくださっている。

写真 18･19･20　３学年　蘇原名人調査隊で地域の方から学ぶ

■４学年「環境を考えよう」

４学年の総合的な学習の時間には、以前から「環境」をテーマにした学習を進めてきている。以前は、校区にあるペットボトルリサイクル工場の見学を行っていたが、その工場が閉鎖となり、現在は、プラスチックトレイ制作の企業に依頼をし、訪問授業に来ていただいている。さらに、2020 年からは、県脱炭素社会推進課の「清流の国岐阜環境教育推進事業」で環境カウンセラーの方にレクチャーをしていただいている。「川を汚したのはだれ・海洋プラスチック」の講義は、児童の身近な話題から、地球規模の環境を考える楽しいワークショップタイプの学習で、児童が意欲的に環境問題について学んでいる。

■５学年「みんなにやさしく（福祉を学ぶ）」

市の福祉課の方を招き、高齢者体験キットを装着しての体験学習や車椅子体験学習、視覚障がいのある方や盲導犬を招いての学習会など、いろいろな障がいについて学ぶ場を位置づけている。

写真 21･22･23　５学年　みんなにやさしく（左から盲導犬、高齢者疑似体験、車椅子体験）

■６学年「郷土『蘇原』を見つめよう～自分を見つめよう」

社会科の学習で「市役所見学」を行った際には、各務原市長と対面、各務原市のＳＤＧｓについて話を聞く機会に恵まれた。各務原市では、2020 年度からの「総合計画（後期基本計画）」や人口減少対策、地方創生に向けた「総合戦略」において、ＳＤＧｓを取組の前提事項として位置づけている。児童は、自分たちで進めるＳＤＧｓ達成に向けた活動と比べながら、自分たちにできることを見つめ、児童会活動などに生かしていこうと考えている。

■６学年「お父さんお母さんの話を聞いてみよう」

本校では、卒業を間近に控えた６学年児童に対し、保護者ボランティア１０名程が、その職業観や人生観を語る「保護者講話」を実施している。ボランティアは６学年児童保護者の内の本取組の賛同者で、様々なジャンルの話を聞く機会となっている。児童は、あらかじめいただいている情報から、聞きたい話を選び、２０分程度の講話を２つ選択する。一人の保護者講師が２０名程の児童を担当し、現在の仕事への思いや苦労、これまでの自身の歩みから児童に伝えたいことを熱く優しく語ってくださる。中には、その仕事のミニ体験コーナーなども交えた楽しい時間となっている講義である。身近な保護者であり、友達の父母やスポーツ少年団でお世話になっている方達の話は、親近感を憶え、また、視野を広げる貴重な機会となっている。

■６学年「ロサンゼルスと生中継！海外で働く岐阜県人と交流しよう」

また、2021 年度には、「キャリア教育」の一環として、アメリカ合衆国ロザンゼルスに在住の方

とオンラインで交流する機会を得た。

ある時、筆者（今尾）の高校時代の友人Ｂ氏から連絡を受けた。Ｂ氏は、ロサンゼルス在住で、岐阜県人会インターナショナル（ＧＫＩ）の前会長を務めた人物である。ＧＫＩでは、「岐阜の若者と世界をつなげよう」という目的で、世界で活躍する世界２５岐阜県人会に属する岐阜県人が、小中高生を対象に、海外での体験や学びを話すプロジェクトを立ち上げた。そうした機会をもつことは、学校サイドではどのように捉えるのか、実際にどのようにすれば進めていけそうなのか、とロサンゼルスに住む担当のＢ氏から相談の連絡が入った。「グローバルな視野をもたせたい」と考えていた筆者（今尾）の思いと合致すること、「キャリア教育」として意義のあることと伝え、本校でオンライン講話を実施する運びとなった。

コロナ禍で進んだオンライン（今回は、Zoom）会議は、簡便で精度も高い。問題は１７時間の時差であり、こちらの１４時がロスでは前日２１時となる。本校の第５校時（１４時頃）に、先方は夜間であるが了承いただき、岐阜市出身の現地で活躍するサックスプレーヤーＣ氏との交流が実現した。

本校６学年４学級と現地Ｂ氏、Ｃ氏とオンラインで接続。冒頭に校長より今回のオンライン交流の概要と、Ｂ氏・Ｃ氏の紹介。そして、Ｂ氏からロザンゼルスについて映像を交えて話を聞いた。その後Ｃ氏より、渡米に至った思いやその苦労、そして現在の活躍の様子について映像を交えて楽しく話があり、「将来の夢に近づくためには今どうすればいいのか、考えて。自分で覚えたことは無駄なことは何もないから。」と児童達へ熱いメッセージをいただいた。小学生にとっては、海外での仕事や生活は大きな憧れでもあり、遠く離れた海外との双方向のやりとりに児童が目を輝かせる姿が印象的であった。

写真 24･25･26　６学年　蘇原から世界へ（左から保護者から、各務原市長から、世界で活躍する人から）

これまでも、小学校で大切にしてきている地域でのこうした活動は、コロナ禍で自粛してきたものもあるが、「ひと」や「もの」との関わりが減少しつつある現代こそ必要と考えられる。そして、自分とは違う多様な他者やものとの関わりを通して、児童にどういった力を付けていくのか、教師サイドは明確に描いていく必要がある。

5-2. 蘇原コミュニティ・スクール

各務原市では、「誇り・優しさ・活力ある児童生徒」の育成を目指している。これを、中学校区ごとに小中学校が連携し、家庭や地域と共に推進しようというものが、各務原市型の「コミュニティ・スクール」である。この取組は、小中学校９か年を中心に、意図的、計画的に子ども達を育てていこうとするものである。地域、家庭、学校がそれぞれ役割を果たしながら、子どものよさや可能性を引き出し、伸ばす取組として、市民みんなで育てる「市民活動」としてスタートしている。

蘇原コミュニティ・スクール（以下「蘇原ＣＳ」）では、「“ひとりだち”できる子へ」という願いのもと、「子ども達にとって地域の取組全てが授業である」という考え方で、活動を進めている。

5-2-1. 蘇原ＣＳの活動

蘇原ＣＳでは、主に以下の様な活動を行っている。

・放課後子ども教室	・放課後学習室	・フリー参観	・キャリア教育
・地域ボランティア	・ふれコミ（ふれあいコミュニティ）隊		・祭り、奉納神みこし
【小中交流】・学習会	・体育祭、運動会	・あいさつ運動	他

地域の方が講師となり、遊びや学習をする、様々な職種の方から、生き方・考え方を学ぶ、そして、夏祭りや秋祭り、奉納みこしなど、地域に脈々と続く祭りに子どもたちが参加し、地域の人の思いや伝統を学び引き継ぐ。また、小中学校の交流では、小学６学年児童が中学校の体育祭を参観し、中学生の代表が小学校運動会応援合戦の審査員を務める。「あいさつ運動」では、中学生が登校前に母校（小学校）の門に立ち、登校してくる小学生をハイタッチあいさつで迎えてから小学校を去り、笑顔で中学校へと登校する。児童生徒は大変張り切っていた。また、地域の関係者も、小中学生との関わりに一段と積極的になる様子がうかがえた。そうした矢先の新型コロナウイルス感染拡大であった。

図７　蘇原ＣＳの活動内容

2022 年度に入り、いくらかの地域活動・教育活動を再開しているが、諸制限の中で活動の縮小化を余儀なくされている。中学校の体育祭は、現時点で学年体育大会となり、保護者参観も見合わせており、小学生の参観も中止している。

今後、新型コロナウイルス感染拡大の状況次第であるが、ポストコロナの教育活動・地域活動の有り様は、コロナ前までとは違う形での実施となると考えられる。蘇原ＣＳ等を中心に検討し、「蘇原の子ども達の　“ひとりだち”」をめざす活動を進めていくことが重要である。

5-2-2. 蘇原ＣＳへの期待

昨今、地域の教育力は低下していると言われる。核家族化が進み、地域自治会に加入しない世帯が増え、地域運営に支障を来している地域もある。また、家庭の教育力については、家庭により格差が大きくなっていると言われている。そしてさらに、新型コロナウイルス感染拡大が追い打ちを掛けたのではないかと懸念する。

しかしながら、2022 年１１月に実施した青少年育成市民会議主催の「ふれあい広場」では、制限のある中であったが、３００名程の児童、２００名程の地域住民と保護者、５０名の中学生が一堂に会し、ゲームやワークショップなどを楽しむ時間となった。マスクをしている子ども達からは、制限の中とは言え、ついつい元気な声がもれ、それを温かく見守る地域住民の笑顔あふれる会となった。地域や保護者の方が、子ども達のためにと懸命に関わる姿が大変印象的で、多くの人達がこうした場の再開を願っていたのだろうと痛感した。こうした地域の力を今後どう教育に生かし、さらに蘇原ＣＳの意義や取組・活動を高めていくには何ができるのかを考えていく必要がある。

ここで、ポイントとなるのが「学校運営協議会」の存在である。宛職で毎年委員が入れ替わるのではなく、継続的に務められる委員で構成されることが重要である。そこに、全体像を描ける会長の存在、そして、実務を中心になって担当するコーディネーターを位置づけていくことが望ましいと考えられる。ＣＳ化前の学校評議会では、事務局の役割を、学校の教頭が務めてきている。その体制のままでは、結局学校依存となり、地域での児童生徒育成の活動にはなり得ない。また、そのコーディネーターは無償ボランティアでなく、有償の位置づけとすることが重要である。その点については、教育委員会等と検討をし、予算化していくことが必要である。

写真 27 校門に掲げた蘇原ＣＳスローガン

現在の蘇原ＣＳは、発足して４年目を迎える。一部（ＰＴＡ会長）を除く委員は、継続して４年間務めていただいている。人選に時間をかけて決定した委員であることから意識が高く、毎回建設的な話し合いがなされる。願う「蘇原で育つ子ども」の姿について具体的な姿を共有し、さらに「学校に協力できる

人材バンク創設を」という声があがっている。

5-1. の項で述べた「蘇原を学ぶ（ふるさと学習、地域の学習）」については、まさにそうした人材を活用し、接続していく必要がある。学校では職員が入れ替わっていっても引き継ぎをして地域とつながることができるよう進めていくが、ここにＣＳが関わることで、地域が児童生徒に強く働きかけていくことになると考えられる。

6. おわりに

予測困難な時代である。新型コロナウイルスの感染拡大やロシアによるウクライナ侵攻、さらには脱炭素化に代表される環境問題…。ＳＤＧｓのめざす 2030 年がどのようになっているのかは、現時点では正直分からないところではある。しかし、次代を担う子どもたちの育成について歩みを止めるわけにはいかない。

“Think Globally、 Act Locally. Think Locally、 Act Globally.”

「世界を意識して、地域で行動する。地域の経験を活かし、世界で活躍する。」

大きく変化する時代の学校教育を、そして地域教育を、学校や地域の伝統を大切にし、グローバルな視点で考え、地域・保護者･学校の協働を柱に力強く推進し、たくましい子どもたちの育成を図る。それを生かし輝ける次代を築く、そんな児童の育成について考え、邁進していくことが肝要である。

執筆分担　１～４：今尾　５～６：今尾、益川

注）

1)『小学校学習指導要領』2017 年 3 月改訂（文部科学省）を参照。

2)「学級の支持的風土」とは、成員が互いを認め合い、失敗や間違いが受け入れられるといった、学び合いのある、どの子にとっても居心地がよい学級環境を言う。